

CATALYST*

カタリスト

佐藤慶子

20年以上、ろうの子供たちに音楽の楽しさを教える作曲家

「わからない」を受け止め 世界観を広げる



ろう者は耳で音楽を聴くことができません。けれど聴覚で捉えられるものだけが音楽でしょうか。私は作曲家として、五感を通じて表現し創作する「五感の音楽」という概念を提唱しています。作曲やピアノ演奏はもちろん、映像・演劇・美術・舞踊などの表現を総合したコンサートやイベントを開催するなど、聴覚という枠を超えて、様々な人が自由な感じ方で楽しめる音楽を追求しています。その取り組みの1つとして、1986年から耳の不自由なろうの子供たちを対象に、「響きの歌」というワークショップを毎月一回開いています。

自由な表現方法 個性と感性を伸ばす

ワークショップは、小学校低学年から高学年の子供たちが参加しています。ろう者にとって、音楽はとてもデリケートな領域。中には音が聞こえることを前提とした学校の音楽教育で、すっかり苦手意識を持っている子や、どうせ楽

しむことはできないと消極的になっている子もいます。けれど、ここでは学校の音楽教育のように、ドレミといった音階の教育や、3/4、2/4などの拍子、正確な音程などにこだわりません。私は場所と楽器、道具といった素材を与えて、最小限の手本やアイデアをみせるだけ。できる限り子供たちが自由に表現する方法を大切にします。リズムや音の響きに合わせて、身体を自由に動かしたり、サインソングという手話で作った歌を歌ったり。音楽の楽しさや響きの美しさを伝え、その子らしい感性を育むのです。すると子供たちは、音楽で自分を表現できるようになり、自信が付いて積極的になっていきます。

振動や響きを楽しむ まつげで感じる音楽

それでは、ろう者が体験している「音のない世界」とは、一体どんなものなのでしょうか。耳で音を捉えることができる聴者は、いくら耳を塞いでも、ろう者と同じ世界

を体験することはできません。音楽は耳で聴くものだと先入観をもってしまい、「ろう者にとって音楽は実感できるものなの？ 楽しめるの？」と不思議に思う方も多かもしれません。けれど「まつげ」で音楽を鑑賞する、ろう者もいるんですよ。世界中を見ても、まつげで音の響きを捉える方は特別な能力の持ち主だと思いますが、ろう者の中には、音の振動や響きを皮膚感覚で捉え、その感覚を音楽として楽しむ方が沢山いるのです。音楽など芸術とは、心で味わうものです。聴者は耳、ろう者はまつげや皮膚が音楽の入り口にあるだけで、その先にある心が、音楽に対して楽しい、素晴らしいと感動するのです。

耳が不自由だから音楽は楽しめないだろうと決めつけるのではなく、自分にはわからないけれど、別の感じ方の世界が、ろう者には広がっていると認めることが大切です。多様な音楽の感じ方があると理解することは、ろう者と聴者、互いの世界観を大きく広げる第一歩になると思います。

文/牛久珠理(編集部)

PROFILE さとう・けいこ

作曲家。株式会社MuCuL代表取締役。桐朋学園音楽大学作曲科を卒業後、82年に音楽活動の拠点メディア・ワークスを設立。83～84年、ニューヨークにて民族音楽、環境音楽、音楽教育などを研究。日本文化芸術財団現代芸術部門賞、95年キリンアートアワード奨励賞受賞。07年、音楽と文化事業のためのMuCuLを設立。